

私と東亜同文書院

芥川賞作家 大城 立裕

大城でございます。20数年ぶりに講演を致します。私の喉は30分しかもたないということで、講演は20数年来お断りしておりますが、今回は、東亜同文書院の後進とも言うべき愛知大学からの要請をいただきまして、30分しかもちませんよとお話をしたら、それでもいいからということで、お受けいたしました。喉の調子がうまく行けば、もう少し延びるかもしれません。話は下手なので申し訳ありませんが、お付き合いお願い致します。

旧制沖縄県立二中に入りましてから、東亜同文書院という大学が上海にあるらしいということを知ったのは、いつごろだったか忘れましたけれども、3年生ぐらいの時に進路を決めるとき、自分は高等学校の文科から大学の文学部あたりに行くのが妥当かと思ったんですけど、家の経済事情が色々あって、県費で大学を出られるというだけの理由で同文書院に行きました。ああいう珍しい学校へどうという理由で行ったかと、よく質問されますけれども、大した理由はなくて、ただ県費で学校を出られるということで行ったんです。

ただ、県費というのはくせものでしてね。他府県にはいろいろあったようです。たとえば、東京都は、当時まだ東京府でしたが、半額で4人派遣。大阪府は全額で5人。熊本県は半額で3人。沖縄県は年によって予算しだい、出さない年のほうが多かったようですが、私が入りました時は、学費75円の50円を県が出すから、25円は自分で出せということで。私の父親が県庁の職員で、月給を100円もらっていたうちの25円は私がかすめとっていたということです。それに月々の私物の小遣いとして30円はもらわなくちゃならない。100円の内、55円は自分がもらっていたことになります。小遣い30円といいますが、私、1943年、昭和18年に入りまし

たが、昭和19年になりますと、その一年間に、上海のインフレーションで、物価が5,000倍にまではねあがりました。それで日本人町まで電車で1時間ぐらいですが、その往復の交通費に30円がとんでしまいました。たまたま在留邦人の家庭教師のアルバイトの口ができたものですから、家に小遣いを送らなくていいと電報を打って、小遣いを自弁しました。

あんな学校へどういう理由で行ったかというのと、とにかく家庭の事情で行ったにすぎないと答えておりましたけども、これが、まあすごいところへ来たと思うようになりましたのは……。長崎で船に乗りまして、あくる日の朝8時頃、甲板へ出た時に始まりました。甲板へ出てみたらびっくり。海が真っ黄色なんですよね。海が真っ黄色。そのまま揚子江に繋がってることはすぐ分かります。ただ2時間ぐらい陸が見えないです。のちの話になりますけども、田舎を訪問する機会がありましてね。その農村の小学校へ行ってみました。その小学校の子どもが海ということで、絵を描いてあるんですが、海の水を黄色に塗ってあるんですよね。とにかく甲板へ出て、あ、揚子江が近いかと思いながら、2時間たってようやく陸が見える。それからいつの間に揚子江に入ったか分からないうちに、揚子江から黄浦江へ入りまして。そして朝起きてから8時間ぐらいたってからですかね。上海の匯山碼頭(ウェイセイ・マトー)と呼ばれる栈橋に着きました。海が真っ黄色になって、2時間たってはじめて陸が見えるということに、大陸のスケールというものを感じましたから、最近みんな飛行機で行きますが、本当に中国を知りたいのなら船で上海へ渡ることをお勧めしますということを何度かエッセイに書いたことがあります。

さて、栈橋で真っ先に印象的に目に飛び込んだ

のが苦力(クーリー)というもの。労働者です。あれは穀物だろうと思うんですが、裸になって俵包みを船から港へおろしている苦力たちを見て、それこそ貧乏と労働の極致といいますか。それが見えるんですね。その時に初めて思ったのが、自分たちはこの学校でこの人たちのために生涯働くんだという意識が頭の中に飛び込んでくるんです。それが第二印象です。

それからバスに乗りまして、同文書院へ行くんです。黄浦江は上海の東の端にあります。同文書院という学校の場所は上海の西の端この郊外にある。そこへ向かうと、まもなく有名なバンドってところ。バンドというところは昔からの川沿いの一郭ですね。そこにたくさんの外国資本の銀行や会社があります。その時にも印象に残りましたが、外国資本のつまり植民地侵略の象徴です。そこを過ぎましてフランス租界へ入ります。フランス租界は、実に瀟洒な建物たちがならんでいます。実は上海の租界と言うものは、いわば国内植民地ですね。租界に二通りありまして、一つがフランス租界、もう一つが共同租界といいます。しいて言えば三つある。三つめが日本人街で虹口(ホンキュー)とよばれる地区ですね。その三つのうちでフランス租界だけが際立ってスマートでハイカラ。そこにプラタナスの並木が実にきれいです。そのプラタナス並木というものが戦後に初めて行ったのは1980年でしたけれども、ものすごく伸びて両側から先が抱き合うように倒れてトンネルを成している。80年というと、文革の余波がまだ残っている頃で、建物は昔のままのかたちで古びに古びているのに、プラタナスの並木だけが成長しながら変わっているというのが非常に印象に残っています。最初に第一印象にありました、黄色い海。それから第二印象にありました、栈橋の苦力。それから第三印象にありました、フランス租界の植民地風景。それらが1日目の8時間のうちに、いっぺんに頭の中に入ってきた。それが私の上海の、第1日目の印象です。それが、それから3年間いたわけですけど、それを貫くテーマだったかと思います。しかしながら、それは理想からいったテーマでありまして、自分が日本人として、やがてそこに飛び込んでいくところの日本の軍隊というものが中国で何をしているかということ

思い合わせると、私の頭はあの三年間のうちに、かなり混乱しながら自分で整理するように努めたことになります。

第1日目にそれだけの印象を頭の中に叩き込みまして、それから東亜同文書院というものの生活が始まるわけですね。全寮制で学生全部が、寮で生活するばかりです。学外で寄宿舎の外で下宿をする者が1人もおりません。それは、同文書院のマイナス面の一つであつたろうかと思います。おかげで上海、中国人の家庭の中まで観察が及んでない。ただ時代が時代で外へ放り出すことは、学生の生活安全上、やむをえなかったということはあるかと思います。全寮制で予科と学部と専門部と別々に寮がある。

予科1年の頃の生活のテーマは、まず中国語の習得ばかりといってよいでしょう。これは厳しい。一週間で13時間の授業。それだけではないです。授業の成果を持ち帰ってその夕方、夕食前に1時間。それからあくる日朝食後に1時間。これを上級生の人につきまして、猛訓練の復習をするんですよ。この猛訓練がほんとに猛訓練なんです。まず大きな声を出すんですね。中国語にイントネーションが4種類ある。アーと平板な発声、これ第1声です。第2声が延ばすときに上へ上がる。第3声がアーと下げてから上げる。第4声がアーと落とす。すべての文字にそれがついてるんです。中国語の教科書は文字のひとつひとつに、この左下の隅が第1声、左上の隅が第2声、右上の隅が第3声、右下の隅が第4声と、丸がついてこの文字の4声はこれなんだという指定があるんです。教科書の言葉には、つまり文字に、みんなそれが付いてるんです。しかし中国人に訊いても分かりませんよ。これ何声かと聞いても。彼らは全然意識せずにしゃべっていますから。この発音練習から基本的な単語習得。1週間で授業が13時間。寮に帰ってからあくる日まで2時間、ですから日に2、3時間以上はやっていることになりますね。「それだけしか声が出ないか、それだけしか声が出ないか」と、上級生の叱声罵倒、ものすごいんです。そのうち、声がつぶれます。でも無理して声を出してるうちに、人間、不思議なもので2週間もそれをやっているといつの間にか声も戻るんですね。何かこれは琉球三線やつ

てる人にも同じことを聞いた覚えがあります。その声が戻る2週間目ぐらいの頃からは、発音が一人前のものになったような気がします。同文書院の校庭に、庭にプラタナスの木がありましてね。そこにカラスがたくさん来てとまるんですよ。我々の発音練習のことを書院ガラスというニックネームがついてまして。予科1年の頃は普通の発音どころか、中国語の訓練だけでものすごいプレッシャーでありまして。何でこんな学校へ来たんだろうと思って1度は泣きました。泣いたのは自分だけかと思ったら同窓会で聞いたらみんな泣いたそうです、一度は。同文書院というところは商科の単科大学ですから理科系の人が来ても全然面白くないわけです。私の同期に、県費制度いう、県費で大学を出られるという理由だけで来たものが途中で帰った者がいます。退学の状態で帰った。1学期だけで2学期から出てこない者もありましたけど、中にはこの中国語で退学した者も、また自殺したのもいたんじゃないかと、私は思っております。そこでいじめられたといひますか、あれだけの訓練を受けて、3か月目には買い物ができるようになり、1年経てばある程度の会話ができるようになるわけです。

私、自分たちを振り返ってみて、内地の学校で中国語をやって、それで一人前になる人が不思議というか感心するほかはないと思っています。というのは、我々は先輩から鍛えられながら嫌だなあ、嫌だなあと思っているところへ先輩と一緒に街へ遊びに出るでしょ。すると町の人と先輩がペラペラとしゃべっているのを聞くと、ああ、やらなきゃならないなど。その繰り返しですよ。内地ではそういう機会なんてないでしょ。にもかかわらず、あれだけ内地で本物の中国語を身に着けるという人の努力に感心致します。予科2年になって後輩を教えます。自分もこんなに下手だったかなと、みんな思ったらいいです。

中国語の訓練の話ばかりしましたが、後から考えて非常に残念だったことは……。

軍隊に行くことは決まってるわけです。昭和18年、その年の、我々が入った年の12月に学徒出陣がありました。その頃に思ったのは、将来のことなど考えてもしょうがない。とりあえずは軍隊へ行ってきたからのことだということです。学校の勉強も速

成といいますか、すぐ役に立つようなものをという考えがありまして。焦って中途半端になりました。その辺は、非常に悔しい思いをしたものではありません。

この中国語についての後日談を、すこしお話します。のちに戦後になって軍隊から帰ってきて、学校はなくなって、寮を追い出されて、日本人町に30名ぐらいですかね、学生たちで集団生活をしている内に通訳、軍需品接収の通訳のボランティアの募集がありまして。そのままでは食うに困りますから手を挙げました。私がくじ引きのように配属されて行ったところは貨物廠です。そこで糧秣や衣服の接収業務の通訳をする訳です。もちろん中国の国民政府の經理部の人が受け取りにくるわけですけども、そのほかに警備隊というのがいます。その警備隊が一個小隊ぐらいいたんですよ。この警備隊の人たちが2週間おきぐらいで所属部隊が交代するんですよ。そうするとどういふことになるかと言いますとね。言葉がみんな違うんですよ。それぞれに訛りがひどい。我々が同文書院で教わった中国語は純粋な北京語です。それをしゃべった。相手の反応が全然違う。私考えましてね。まず、書いてくれと。書かせてこれを読めと、二日ぐらいそれを続けたんです。筆談を。二日ぐらい続けると、そこで頭の中に入るのは、あ、この地方の人はこういう訛りをするのかと。で、2週間おきが変わるんですよ。また別の地方の部隊がくるんです。また訛りの体系が違うんですよ。そのうちにかかなりの数の訛りの体系が頭に入りましてね。大雑把に中国全土いくつかに分けて、この辺りの人はこういう訛りをするんだなという、この訛りの体系を覚える。非常に役に立ちました。おかげ様で戦後何年か生きてきてから、時々役立ちました。最初に経験したのは1951年に、台湾から貿易視察団が来まして、私は貿易庁に勤めておりましたので、通訳をさせられましたが、彼らと話す時に、あんたはどこ出身かと聞いて、答えをもらったら、ああそうかと、頭の中に訛りの体系のインデックスが入っているので、それが役に立ちました。10年ぐらいはそれで役に立ちました。戦後10年ぐらいまではですね、どの地方の中国人と会っても意外と順調にいくことがあったんです。今はもうだめですけどもね。

予科2年に入りました時に大変な体験をしました。東亜同文書院という学校は明治34年、1901年に創立以来、中国のために日中友好のために、提携のために学問を仕込もうというのですが、時代に翻弄されました。予科2年にあがりました時に、とんでもない経験をさせられたんです。日本の軍隊が、食料の米を買わなくちゃならないんだけど、現地で調達せよという大本營の指示ですかね。現地で調達しなければならないんだけど、通訳及び警備の目的のために同文書院の学生を徴用ですかね。とにかく協力しろということになりまして。我々予科2年生がこれにあてられまして、それぞれ4、5人ぐらい班を組んで、地方の村々へ行くんです。陸軍二等兵の服装をして、銃も持って行くんです。中国の農民を脅しながら、軍隊の米を強制的に買い上げるのです。直接に買い上げる役目は、内地から来た総合商社の出張員ですが、これに協力させられたんです。農村ですから、相手は方言で言葉で通じるはずはない。そして、銃は弾こそ撃たないけれども、銃剣を突き付けて。実はその時分、5月ごろですか、米は全部農村では売りつくして、自家用米しか残ってない。それを脅して、それすらも召し上げていく。しかもその値段たるや公定価格である。公定価格というのは闇価格、つまり時価相場の何千分の1ですかね。農民は泣く泣くこれに応じる他はない。時には寝室まで入って、米あるだろう、どこに隠していると銃身を突き付けて入るのは我々の役目なんですよ。これをみんな忸怩たる思いを持ってそれをやっているんです。

実は、学内のあるゼミの指導教官が左翼であったために、内地を追われて来た人だったんですね。そのゼミの学生たちが日記を書いて出せと言われたらしいです。同文書院ということは面白い学校で、外地にあったために、内地におられなくなった人がよく逃げ込んできたようです。優秀な人が中にはいたわけですよ。その中の一人が日記をつけて報告書を出させた。多分これが今もどこかにあるはずなんですよ。この先生が内地へ持っては帰れないですよ、引き揚げのときは。文字を書いた物は持って帰れないということになってましたから。たぶん中国の資料館かどこかに潜んでるはずなんです。

昭和19年の秋から20年の春にかけて、軍隊に行きましたけれども、その直前の10月ごろに勤労働員があり、三菱造船所に通わされました。じつは、上海では労働力は中国人で間に合っていたのですが、たぶん内地への義理で動員の歩調をそろえるつもりであったのでしょうか。これは、中国人の職を奪うことにもなったのですが、三菱も賃金を払わなくてもすんで、ここにはなんらかの軍との結託が働いていなかったらどうかと、私は勘繰っています。無駄な動員をさせられましたが、そこへ空襲があり、防空壕に直撃弾が落ちて、6人の同級生が即死して、1片の肉も残らなかったという悲劇があります。

じつは、私はその動員に1週間だけ行って、あとは陸軍に移管されて、中国共産党新四軍にたいする情報機関で、翻訳の仕事をしました。接敵地区で危ないというので、志願者が少なかったのですが、中国語に強い興味のある者だけ、11人がこれに行きました。接敵地区には違いないのですが意外と安全に、中国語の勉強にもなりました。皮肉な体験でしたが、話が長くなるので省きます。くわしくは、『朝、上海に立ち尽くす』という小説に書きました。

軍隊にも行きまして、合計3年ぐらいいたわけですが、それでも。その3年ぐらいうちに私の頭に複雑な思いが蓄積していったんですね。実は上海へ行く前に日本では中国共産党というものがあるということすら我々は教えられていなかった。日本のマスコミに全然出てこないですよ。皆さん不思議に思われるでしょうが、戦前は中国共産党というのを我々は何も知らなかった。ところが行ってみたら、ある場所を日本軍が占領して、国民政府軍を追っかけて行き、占領地が手薄になると、そこへ中国共産党が来て、それを横からくすね取る。この三つ巴の戦争が中国戦線の実情なんです。我々は内地を出るときは日本軍の優勢が当たり前で行っているんだから、戦争はまもなく終わるに違いないと思っていった。しかしこれは、とんでもない夢想なんですよ。そういう色々な経験から私の頭は大体ああでもない、こうでもないという、バランスがいいのか悪いのかもわからんような、そういうふうになってきたんです。そのいわゆる思考方向の癖がつい

て、戦後の沖縄についても、それで、そういう思考で書いてきたつもりです。

先ほど話しました軍需品接収の通訳のとき、相手の将校が私に言いました。お前、琉球人だというのに日本語の通訳なんかしているとは何事だと。私は答えました。確かに琉球はもともと中国のものであるか日本のものであるか分かんところがあるかもしれない。ところが人間は誰でも教えられた通りにしか考えないもので、我々は子供のときから日本人として教えられてきたから、そのような頭しか持っていない。本当はどっちが正しいか分からないよ、とごまかした。こんな複雑なことをどれくらい正確に言えたかどうか分かりませんが、相手は納得したのか聞き取れなかったのか分かりませんが、それで終わった。そういう経験もあります。

話があっち行ったりこっち行ったりして、申し訳ありませんが、まだ何かあったかな。

まあ少し上海の街の話を付け加えます。休み時間あるいは休みの日になりますと上海の街に出て行くわけですよ。上海の街というものがものすごい人出でごったがえした街でして。そして色々な階級、民族の人がいましてですね。そこに面白い光景を一つ見つけました。乞食が多いんですね。乞食と街娼、売春婦が多いんですが。一人の乞食が道路に座っていて、すごい詩を書いているんですよ。達筆でね、乞食ですが、チョークでアスファルトの上に達筆でながい詩を書いているんですが。書いたのを読んでみますと、蒋介石をしきりとほめちぎる言葉を書きつらねているんです。目の前が日本軍に占領された日本人や中国人がいるわけです。ところが彼は堂々と自信ありげに蔣総統は偉いというのを書きつらねている。乞食だから誰も叱る人もいないでしょうけどもね。なにかそういうアナーキーなといいますか、我々の知らないところでそのアナーキーなエネルギーというものが上海の街に潜んでいたんだろうと思います。我々が道を歩くと人力車が追っかけてきて、どこ行くか、いくらで行くかと、その値段をふっかけてくるから、高い高い高いと我々はとっとと歩いて行きますが。それでだんだん値段を安くして、いいところまで下がったところで、よし乗ってやろうと乗って。そういう経験もありましてね。この人力車引きたちは、その頃は日本語を勉

強しているが、日本軍が来るまでは英語を勉強していたんだそうです。そのように上海の人は鍛えられているんですね。その鍛えられているのを見た私どもは、もともと日本のものを背負いながら、新しい日本から見ると想像もつかないような文化に触れています。

実は上海の文化そのものもそうですけれども、学内の雰囲気も実は東亜同文書院というところは日本全国の旧制大学、旧制高等学校みんなそうですけれども、学内の自由って言うんですか、酒、タバコを自由にしながら踏み外さないのが旧制高等学校、大学だと思うんですよ。当時内地では昭和18年以降というのは戦時体制で頭は長髪から丸刈りに変わるんですね。ところが同文書院はそういう風潮が内地から流れて来るのが半年は遅れたんですよ。そして、来ている学生が台湾、朝鮮、満州、色々な民族が交じり合ってきているんですよ。昭和18年の12月1日に、学徒出陣があります。学徒出陣の壮行式というものが広い中庭であつたんです。そこで色々な学生が立って演説をした。その中で朝鮮出身の学生が1人、何を言ったかという、僕は諸君がこんなに感激しているのがうらやましいと言ったんです。朝鮮出身らしいといえばそうですが、これはね、おそらく内地で言ったら大変なことになっていたんだろうと思います。そして、外地出身の学生は内地でもやりたかったらと思う。同文書院という自由な空気に甘えてといえますか。気を許してあれだけのことをしゃべったんだろうと思います。聞いている学生も、それを批判したり叱ったりするものがないんですよ。どんな民族文化があるうとそれぞれに許しあうと言いますか。学生の中でもそれは右翼もいるし左翼もいますよ。ところがいがみ合う事は全くないです。それより勉強したいだけなんですよ。そういうところで育ったことは幸せだったと思います。揚子江を初めて見たとき以来3年間に仕入れたものはそれくらいだったというところで、この辺で失礼いたします。ありがとうございました。

《以下、質疑応答》

司会(藤田教授) 私、先生の作品の中で、東亜同文書院に関しては、『朝、上海に立ちつくす』と東

亜同文書院に関する、貴重な作品がございます。現在中央文庫にそれが入っておりまして、今日お話しになった内容を含めて書かれておりますね。だから、ご関心のある方は是非その本もお読み下さればと思います。それでは、折角の機会ですので良かったらご質問とか、ご意見といえますか、ご感想とかございましたら。大城先生と絶好のチャンスかと思いますけど、是非。いかがでしょうか。

質問A 大城先生。本日は本当に貴重なお話、どうも有難うございました。私は、県内に住む者なんですけれども、昨今のこのような日中関係の中で、民間の一般人の交流するのが非常に大事だと思っております。先生は多感なお年頃の、しかも年代的に昭和18年、19年という中で中国で、その青春時代を過ごされたんですが、その間にですね、現地の同年代の中国人の青年との交流があったのかどうか、また教えがたいそのエピソード、中国の方や、学生仲間でも構わないんですが、そういう、もしエピソードがあればお聞かせいただきたいと思います。

答 良いご質問だとは思いますが、残念ながら私当時は中国人とあまり付き合った相手はございません。ただ、先ほどちょっとお話ししましたが、中国の軍人が言っていました。お前は琉球人だというのに、どうして日本の軍隊の通訳なんか勤めてるんだという質問を受けた。それで思い出しますが、我々は入学しましてね。教科書を貰いますよね。その教科書の中にね、地理の教科書があるんですよ。それが中国の中学校の教科書を援用していたんです。左半分に地図がありまして右半分に文章が書かれている。その文章の一番最後のところに、「中国の失われた領土」という項目があるんですよ。その中に十ぐらいですかね、沢山地名が書かれている。その地名の最後に「琉球」というのがあるんですよ。これに気が付いたのは沖縄出身の学生……当時5人ぐらいいましたけど。誰ともその話をすることがない。ということは私だけが気が付いたということではないかと思うんですよ。もちろん他府県出身の学生からも聞いたことがないです。戦後になって今から20年程前ですかね。東京で、中国関係の本を売っている内山書店という本屋が神田にあるんです。そこに入って、中国の領土問

題に触れた資料を、地理の教科書でもと思って探しましたが見つかりませんでした。私が見た限りで、中国人の90%以上の方が沖縄はもと中国の領土であったと思ってる。これはもう私の勘です。それを思うと尖閣問題というものはそんなに単純のものではない。つまり日本側からすると沖縄側からしても、そんなに単純なものではない。中国が野田総理の国有宣言を引き金にしてあんなにも神経質にわめきたてるのは私はとてもよく分かる。それを政治的にあるいは外交的にどう片付けるかは政府の性格によることですよ。中国人のあの情熱のかけかたみたいなものというか、人格的に認識しなければならぬと思っています。あんまり直接のお答えになりませんでしたけども……。

司会 はい。どうもありがとうございました。ほかのかたでいかがでしょうか。

質問B 先生、久しぶりです。尖閣問題ですけれどもね。これは解決法として沖縄が少し役に立つ方法はないですか。

答 わかりません。しいて言えば、中国の認識について沖縄がもう少しシビアに認識、あらためて認識するべきところじゃないかと思いますね。日本サイドばかり頑固にこだわっても中国人を説得できないと思います。

質問B 実は、この話を出したのはですね、私がアメリカの大学にいた時に韓国人が、君は沖縄の人か内地のものですかというので、いや、僕沖縄の人ですと言ったら、じゃあ分かったと。日本人だったら許さないと盛んに言っていました。その学生が。とてもよく質問しました。沖縄だというすぐ仲良くなれるということでした。

答 とてもよく分かります。確かにおっしゃる通り。外国にいた方は多分経験してることだと思いますけども。日本人だと許さないけども沖縄だったら許すということは喜んでいいのか悲しんでいいのかわからないところがありますよね。ところが不思議なもので、我々は日本人だという主張をするのはたで、思わず沖縄だという。初めてアメリカに行ったときに、1965年でしたけれども、私は当時琉球政府の通商課長をしております、アメリカの国際見本市に琉球物産を持って行ってこいと言われまして。当時琉球物産と言っても、壺屋の陶器ぐらいしかないん

ですけれども。アメリカ人が Are you from Japan? と言ったんです。No, Okinawa と言ったんです。何となくそれが飛び出して来るんですね。今日、尖閣問題で何人かの学者たちがこれは祖国でも日本でもなく沖縄に返還して沖縄所有を明確にすべきだという意見書を出したとか言いますけれども。これはそれ以上のことは誰も言えないじゃないでしょうか。以上です。

司会 はい、ありがとうございます。ほかには。

質問C 興味深い話ありがとうございます。二つ程質問です。一つは戦前の上海の住所はですね、私が耳にしたところでは長崎県上海市というふうな住所があったというようなことを記憶しておりますが、先生それは本当でしょうか、どうでしょうか。

答 私も聞かされていますが、半ばジョークだと思いますね。上海に長崎県人がたくさんいたのでしょうね。だからそういう意味で長崎県上海市と言ったんだろうと思います。上海の市民に一般的に通用している概念ではないでしょう。

質問C もう一つ。色々大学のレポートを読みますと、東亜同文書院の学生は調査旅行に出られたそうですね、先生は経験ありますか。

答 ああ、調査旅行の話をするのを忘れました。実は私行ってないんです。あれは学部2年になってから。私はその前に学校が閉鎖されて、中途退学していますから。学部2年になっての夏休みにグループを組んで中国全土調査して、それが卒業論文になるんです。その詳しい話はそこにいらっしゃる藤田先生の『日中に懸ける』という同文書院についての立派なご本がありまして、それに詳しく書かれておりますけれども。とにかく中国全土の調査。同文書院では「大旅行」と呼んでいましたが、何年頃から始まったんでしょうね。

司会 1907年から。

答 1907年。1901年に創立しましたから、それから6年後に始まっているんですね。その調査旅行の資料、私は行っておりませんが、それが非常に悔しいですね。私の先輩が行ってきて、当時は中国語のことをシナ語と言ってましたが、シナ語でケンカするのはきついなあと言っていました。どこどこで宿屋のおやじと大喧嘩してね、とか言って、話してましたがね。とにかく実に自由な楽しい調査

旅行をしたらしいです。その調査報告書の膨大な資料がありまして。その一部分が愛知大学に入っているそうです。他の部分が北京の図書館に入っているそうです。それを日本に返してもらいたいという申し入れもあるようですが。まだそれは動いてないと聞いております。藤田先生のお話によると、調査報告書の文章は立派なものだそうです。当時の学生たちの文章能力というものに感心したとおっしゃってました。

司会 はい、どうぞ。

質問D ご講演ありがとうございます。中国語の勉強を習った話は十分聞かしていただきまして。その他理科系じゃなく文科系かという話ですから、そうすると、どんな授業といえますか、どんな学科があるんでしょうか。

答〈別項「同文書院の教育」参照〉

司会 はい、どうもありがとうございました。最後にもう一つだけ、もしございましたら。いかがでしょう。では、もしないようでしたらこれで大城先生のご講演を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

別項 同文書院の教育(44 期予会報『徐家匯ニュース 第 42 号』予定稿より転載)

2月16日に、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの主催で、講演会と展示会が沖縄であり、私は「私と東亜同文書院」という題で講演をした。そのとき、講演のあとに質問をうけた一つが、中国語のほかにどんな教育があったか、というのであり、これに答えて話したことが、まともりわるく中途半端に終わったので、のちの記録のために、ここにあらためてまとめなおしておきたい。

東亜同文書院の教育には三つの柱があった——というのが、私の個人的な解釈である。

第 1 の柱は予科における、内地の旧制高校と同じような一般教養。それには語学をふくむが、第 2 外国語としての英語、ドイツ語(選択)はともかく、中国語は(さきに講演で話したように)教養を通りこして実用能力を重視したから、のちに述べる、第 3 の柱としての「中国研究」とからむものと言ってよい。

第2の柱は、経済学部、商学部というべき教育で、これは、建学の理念に見合うように、卒業後の職業のほとんどが、中国での実業に関わるからである。予科のうちに商業簿記もあって、商業学校出身の学生にとっては楽なようであったが、大方の学生にとっては、一般教養をはみだす荷物に見えた。

第3に、これが当然の特質になるが、「中国研究」である。建学の理念のひとつに「実学」というものがあり、それで、そのための特殊な科目のみならず、教養課目にせよ、専門課目にせよ、加味せられることが多かった。たとえば、予科で「大学」「中庸」の講義が「漢文」という課目名であり、歴史の講義でも「中国の不平等条約」というテーマに力をこめられるなど、教養の講義に教授の裁量が、このように加味されることがあった。語学で、中国語が教養という概念をはみだすほどの厳しさをもったのは、第三の柱が、同文書院の理念にかけて威を誇ったものだというよう。

そして、この第3の柱が最高に自己主張をしたのが「大旅行」であった、と言ってよさそうか。学部2年に、全学生が数名ずつの班に分かれ、それぞれの地域とテーマを目指して中国調査をするのであるが、それが卒論になるということが、全教育をここに集中している証拠のようにも見えた。

私たちが身をおいた戦争末期には、まもなく学業から離れて従軍するという運命を自覚して、教養課程でもこの点が、授業にも寮内での生活にも意識された。

たとえば、予科2年で急遽新設された「支那事情」という講座は、数人の専門分野の異なる教授がそれぞれ数回の講義をおこなった、シリーズであり、第3の柱の見本市のようなものであった。上海の租界などというものを、ここで学問として教わった。その他、いろいろ。いわば長編小説を無理に短篇にちじめたような、速成実学である。これを企画したときの教授会は、さぞ見ものであったと思われる。私たちは当然「試験はどのようにするのだろう」と危惧した。そこへ、最終バッテリーをつとめた陣内教授が「自分が代表で試験をすることになった」と宣言し、出された問題が「孫文はなぜ国家資本の発達を主張せねばならなかったか」というのであ

った。先生の8回・16時間にわたった講義は、アダム・スミスの「国富論」にはじまり、マルクスも堂々と論じた経済学説史で、その結論のあたりに、現代中国が資本主義未熟であるとし、将来の共産主義を射程に入れた経済政策の素性を論じたわけで、マルキストであるが故に内地を逃れてきた陣内先生らしいが、まさに、第1、第2の柱をひつくるめで、第3の柱に結びつけた観があった。

このような教育では、第1、第2の教育において効果が目減りするはずであり、学生の勉強にも、兵役近しとの危機感も手伝って、焦りを生じ、予科時代から第3の柱「実学」に目移りがして、教養課程という余裕を失った観があった。入営が近いある夜、私は学友の1人がマルクス『資本論』を、どうせ途中までと覚悟の上で、熟読しているのを目撃して、ある感動をおぼえたものだ。彼のなかで『資本論』は、陣内先生の路線でいえば、やがて来るべき中国社会主義革命を見込んでのことであったかも知れず、第3の柱に急いで食らいついていた可能性が高い。

とはいえ、戦争末期の特殊事情をぬきにしていえば、明治中期にはじまった「大旅行」の報告書の山が、戦後に接収されて、現代の中国でも貴重な資料として珍重されていると聞くと、いま専門家が読んでもかなりの水準であるといわれ、そのような水準をもたらした教育の効果は大きかったといえよう。